

終戦から75年、思えば「戦争」とは、わが家を分散させ、子供たちの行く手を委縮した元凶であった。父の戦死後母の手元に残された4人の子供、母は子を飢えさせまいと死にももの狂いだつた。家も田畑もなく頼る親戚さえなかった。長女の私は小学校3年生から中学卒業まで子守りに行き、口べらしをした。七歳と三歳の兄妹は養子に連れ去れた。母は毎日、養子先の近くで電柱に身を寄せ、我が子の姿を捜した。ある日、「敏夫と目が合った…」と裏庭へ転がり込んで号泣した母の姿を忘れない。しかし、「妹が苛められているらしい。」との噂に、母は弾かれたようにして妹を連れ戻し、やがて弟も帰ってくることになり、我が家は元の家族五人暮らしの花が咲いた。

その夜、近所のおばさんがわざわざ焦げ飯を作って母を呼び、母はそれをエプロンで隠しながら家に飛んで入り、子供たちを階段の下に集め、小さな掌に分け与えながら「これから はな、例えに<sup>ご</sup>し(米の研ぎ汁)を呑むような事があっても、お前たちを手放さんでな。」と、一人ひとりに囓んで含ませた。私はこの時焦げ飯の香ばしい香りと共に「家族」とはこういうものかと、うれしさと感動で涙したのを覚えている。

私はその後、中学を卒業すると同時に、三重県四日市市の鐘紡工場に就職した。「銭とつて母ちゃんを喜ばせたい、母ちゃんの喜ぶ顔が見たい」「これが私の生きる目標だった。

貧しかったけれど、「家族」の原点を教えてくださいました母の背中、それぞれに苦勞をしながら立ち上がって行った四人の弟や妹、そして眩しいような子孫たち…、この見えない糸でつながれた「家族」のぬくもりを、私は今日も指にまぎつけながら数える。